問題に向き合い、解決に向けた言動の大切さを問いかける物語

―宮沢賢治「猫の事務所」の教材性の再考―

中 野　登 志 美

１　はじめに

宮沢賢治の作品は「やまなし」・「よだかの星」・「注文の多い料理店」・「オツベルと象」・「なめとこ山の熊」に代表されるように、小学校・中学校・高等学校の教材として幅広く読まれている。本稿が取り上げる「猫の事務所」[1]もかつては高等学校の教科書教材として採録されていた作品である[2]。「猫の事務所」の先行研究は、「ぼく」が第六事務所でいじめられているかま猫について語る物語であることから、かま猫に対する差別という観点で論じている続橋達雄[3]や高山秀三[4]の論考、かま猫の異質性と受容およびかま猫との共生の問題に焦点を当てた牛山恵[5]の論考がある。牛山のいう異質性とは「夜かまどの中にはいってねむる癖があるために、いつでもからだが煤できたなく、殊に鼻と耳にはまっくろにすみがついて」いるかま猫の姿形を指している。第六事務所の書記の猫たちがかま猫の異質的な姿形を受け入れられないことが、かま猫に対するいじめを助長させている。異質的な姿形のかま猫を受け入れることの困難さを牛山は指摘している。かま猫の異質的な姿形、すなわち、体が汚いということがいじめられる理由の一つだが、これはかま猫にとっては運命的なことで、努力によって克服できることではないという松原正義の指摘がある[6]。しかしながら、かま猫の体がいつも煤で汚れているのは運命的なことであって、努力しても本当に克服できないのだろうかという点に疑問が残る。続橋達雄がかま猫は「現実適応への努力を惜しまなかった」[7]と言及しているように、かま猫は周囲への配慮を怠ることはない。かま猫は第六事務所の書記の猫たちに好かれるように常に気を遣っている。だが、周囲への気遣いや配慮ばかりして、かま猫はいじめの原因の根幹に対峙することはない。かま猫は自分がいじめられている根本的な問題に向き合って考えることをしないから、いじめ問題が落着することはない。そのために、物語の最後で「ぼく」は「半分獅子に同感です。」と語ることになるのである。

かま猫がいじめられる要因として、習慣によるかま猫の姿形の異質性が大きく影響しているのにもかかわらず、先行研究では第六事務所という組織化された社会の中で、かま猫をいじめる書記の猫たちの理不尽な差別を主点にして、「現代社会批判」[8]や「生存競争」によって生じる「いじめの力学」[9]の立場から論じている。他方、教科書の編集委員の一人である松原正義は、いじめを生み出す現代社会の生存競争を風刺した物語と捉えて、「猫の事務所」における教材的価値を「寓話の主題であるお役所仕事的場面で生きる人間の悲哀を自分のものとして知り、それを超える道を探しに第一歩を踏みだすことになる」ところに見いだしている[10]。松原のいう「お役所仕事的場面で生きる人間の悲哀」とは、第六事務所という制度化された機関の出世競争の中で生きることの憂いを指している。現代社会における問題、「猫の事務所」の場合はいじめの問題であるが、それを乗り込えていくには、この物語の場合、かま猫の「異質性」の内実を考察する必要があるだろう。「猫の事務所」は、いじめる立場からの読みではなく、いじめられる立場のかま猫の言動を通して、直面する問題と向き合い、問題解決に向けて動き出すことの大切さを問うている。ここに「猫の事務所」における教材性が見いだせる。「猫の事務所」はこれまでいじめる側を批判した立場からの読みが中心であったのだが、本稿では、いじめられるかま猫とそのことについて批評する「僕」の語りに焦点を当

てながら、この物語の教材的価値について改めて考えていきたい。

２　「猫の事務所」のいじめの三重構造

２－１　猫社会と第六事務所内の序列階層が生み出すいじめの構造

第六事務所の書記として雇用されると「大へんみんなに尊敬され」る猫社会のエリートになる。しかし、「事務所の書記の数はいつも四人ときまってい」て、非常に狭き門となっている。エリートになるには第六事務所の誰かが離職するのを待つしかない。そのために「何かの都合で書記をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれもどれも、みんなそのあとへ入りたがってばたばた」するほどであった。第六事務所の書記になるためには、猫社会における激しい競争に打ち勝たねばならない。多くの猫たちの中から「一番字がうまく詩の読める」たった一人が選ばれて、ようやく第六事務所の書記になることができる。第六事務所の書記になるには、大勢の猫の中から選び出されるための競争に勝ち抜かねばならないのである。事務所の書記になるのは容易ではないのであった。競争に勝ち抜いて第六事務所の書記という特権を得た者は、猫社会において尊敬と羨望の的になる。だが、そこには書記の特権を得た者と書記になれなかった者との間にエリートと非エリートを生み出す社会構造がつくり出されて、猫社会に序列階層化されたヒエラルキーを構築する。出世競争に勝ち、特権を手にした者によって社会的なヒエラルキーが確立するのである。

書記になるためにはまず社会構造が生みだした出世競争をくぐり抜けねばならない。運よく競争に打ち勝って、エリートである第六事務所の書記になれたとしても、第六事務所は黒猫の事務長を筆頭に、一番書記の白猫、二番書記の虎猫、三番書記の三毛猫、四番書記のかま猫という書記の地位による序列階層によって組織化されている。第六事務所の書記になるだけでも厳しい競争に勝ち抜かねばならないのに、大勢の中から書記として選ばれても、かま猫のように書記の最下位である四番書記は、序列化された組織の中では最下位に位置づけられる。第六事務所の中で第一書記から第四書記という地位による階級制度によるヒエラルキーが築かれている以上、序列階級から逃れることはできない。社会的な階層および地位の階級制度の最下層に位置する者はいじめの格好の対象として見做される。四番書記は第六事務所の階級制度の中では弱い立場である。猫社会と第六事務所における二重のヒエラルキーは、下層者を生み出して、いじめの温床をつくり出すのである。

２－２　種別によって生み出されるいじめの構造

第六事務所の事務長のことを「なにせ事務長が黒猫なもんですから」と語る書記の猫の言葉に、第六事務所には種別（猫種）によるヒエラルキーがあることを示唆している。猫社会というコミュニティーや第六事務所という組織において二重のヒエラルキーが確立している。猫社会と第六事務所における社会構造について、牛山の「猫種によって〈社会的・政治的不平等〉が生じている猫社会に、さらに個の能力による選別で〈自然的・肉体的不平等〉を生んでいる。猫の事務所は、構造的に二重の不平等空間をなしてい」る[11]という指摘がある。確かに、「猫の事務所」には黒猫を下層とする種別によるヒエラルキーと個の能力の優劣によるヒエラルキーが社会の階層構造として確立していることが示されている。牛山は「社会的・政治的不平等」を一つのヒエラルキーとして見做しているけれども、「猫の事務所」における社会的なヒエラルキーは、前述したように、厳密には猫社会にとどまらず第六事務所における二重のヒエラルキーが存在する。加えて、第六事務所の書記になるには種別（猫種）だけではなく、「一番字がうまく詩の読める」学識も必要であることから、個の能力の優劣が生み出すヒエラルキーも存在する。つまり、「猫の事務所」には猫社会における種

別のヒエラルキー、第六事務所における地位のヒエラルキーだけではなく、さらに個の能力による優劣のヒエラルキーという三つのヒエラルキーがあり、かま猫がいじめられるのはこれらの三つのヒエラルキーが根底になっている。

ここで看過できないのは、猫の種別におけるヒエラルキーで下層に位置するはずの黒猫が第六事務所のトップである事務長になっている点である。第六事務所のヒエラルキーでは事務長がトップであるものの、猫社会のヒエラルキーでは黒猫は下層に位置づけられて社会的には弱い立場であることから、望月理子は「事務長はかま猫を書記に採用すること」で「自身への差別から逃れようと目論んだ」[12]と言及している。黒猫が事務長だからこそ、かま猫は「あたり前ならいくら勉強ができても、とても書記になんかなれない筈のを、四十人の中からえらびだされた」のであった。猫社会に毛色の種別によるヒエラルキーが確立している以上、黒猫である事務長は被差別の対象から逃れられない。事務長は自分自身の保身のためにかま猫を書記として採用したと考えられる。事務長は何かにつけて、自分の代わりになり得る被差別者としてのかま猫を他の猫たちからいじめられているのをかばう。だが、事務長はかま猫が次期事務長の座を狙っているという書記の猫たちの讒言を簡単に信用し、自分の権力を揺るがす事態になることを恐れる。書記の猫たちと一緒になってかま猫をいじめる黒猫の事務長の態度から、かま猫を庇護する行為は偽善であったことを示している。後に「ぼく」の語りによって、事務長が何かにつけてかま猫をかばっていたのは偽善であったことが明るみになるのである。事務長が書記の猫たちにかま猫をいじめるのをやめるように指図するのは、種別的な階級では自分よりも上位にある書記の猫たちに事務長としての権力が通用するかどうかを確認する術であった。「猫の事務所」には、かま猫のみならず黒猫の事務長の立場からも猫社会のヒエラルキーによって生み出されるいじめや差別の構造が読み取れるのである。

３　いじめを助長させるかま猫の存在

かま猫が第六事務所の書記になれるはずないと思っていたのは「かま猫」である所以であった。

> 竈猫というのは、これは生まれ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはいってねむる癖があるために、いつでもからだが煤できたなく、殊に鼻と耳にはまっくろにすみがついて、何だか狸のような猫のことを云うのです。
> ですから、かま猫はほかの猫には嫌われます。

かま猫は自分の「からだが煤できたな」いために「ほかの猫には嫌われ」ていることを知っていた。だからこそ、猫社会では弱者であったかま猫は書記として抜擢された幸運に心から喜び感謝するのである。書記の猫たちに理不尽な言いがかりをつけられていじめられても、かま猫は耐え忍び、書記の猫たちに少しでも好かれようと常に周囲に気を配る。周囲への配慮を怠らないかま猫の誠実な性質が表れている。書記の猫たちがかま猫をいじめるのは、かま猫の優秀さに気づいていることも一因にある。かま猫は猫社会において最下層の猫であり、第六事務所では四番目の書記である。猫社会や第六事務所のヒエラルキーにおいても最階位の身分であるものの、「あたり前ならいくら勉強ができても、とても書記になんかなれない筈」のかま猫が書記として採用されたのは、かま猫が有能であることを裏づけている。現状ではかま猫は最も地位の低い四番書記であるけれども、かま猫を庇護する黒猫の事務長がかま猫の有能さを認めて、かま猫が三番書記や二番書記、もしかしたら一番書記に出世するかもしれない事態を恐れて、書記の猫たちはかま猫が第六事務所を自ら辞め

ることを目論んでいじめるのである。そこには社会的に最下層の身分のかま猫を蔑視して、自分たちよりも低い地位の者が出世するのを阻もうとする意図が見える。今の自分の地位を失いたくない書記の猫たちがかま猫をいじめるのは、自分たちより身分の低いはずのかま猫が優秀であることに嫉妬しているためであるが、さらに別の理由も考えられると矢花真理子は言及している[13]。

> 書記という地位は猫社会で〈尊敬〉され一定の地位を築いてもいる。今までの猫社会の慣例からすると、かま猫は〈いくら勉強できても〉第六事務所に入ることができなかった。これは語り手が〈かま猫はほかの猫には嫌われます。〉と説明しているように、かま猫は猫社会で一段劣った存在として認識されているからである。（中略＝稿者）かま猫以外の書記たちは、猫社会で〈名誉〉ある第六事務所に猫社会で見下されているかま猫が入ってきたことによって第六事務所が持つ〈名誉〉の価値が下がってしまったと思うのではないだろうか。（中略＝稿者）本来の〈名誉〉の価値を取り戻すためにも徹底的に「かま猫」を排除する方向へと向かうのである。

猫の書記たちがかま猫をいじめるのは、「かま猫」であれば入ることのできなかったはずの第六事務所に採用されるほどの優秀な能力という個の資質だけではない。猫社会において最下層のヒエラルキーに位置する身分のかま猫が、世間から六事務所の同僚として職務に携わっていると見られることが、書記の猫たちにとって自尊心を傷つけられ、許せないのである。かま猫の優秀な能力を認めて嫉妬する反面、社会的に低い身分の者の同僚として自分が見做されてしまう屈辱感が、かま猫の存在を疎ましく思い、いじめに向かわせている。かま猫が第六事務所で働くことを誇りに思うのと同様に、他の猫たちも第六事務所の書記であることに誇りを持っている。かま猫がどんなに書記の猫たちに好かれようとしても、他の猫たちはかま猫が第六事務所の書記として存在していることを疎ましく感じているために、かま猫と書記の猫たちが心を通わして和解することはない。

４　いじめ問題の結末と残された課題

４－１　悪化するいじめ問題

書記の猫たちにいじめられても、かま猫は「事務長さんがあんなに親切にしてくださる、それにかま猫仲間のみんながあんなに僕の事務所に居るのを名誉に思ってよろこぶのだ」と事務長の親切心とかま猫社会の出世頭としての誇りを心の糧にして､かま猫は書記としての職務を全うしている。しかし、かま猫が風邪をこじらせて歩けなくなったために第六事務所を一日休んだことが、かま猫（第六事務所の猫たちにも）にとって事態は思いがけない展開になる。発端は「今日はかま猫君がまだ来んね。遅いね。」という事務長に対して、「なあに、海岸へでも遊びに行ったんでしょう。」といった白猫の言葉であった。書記の白猫の言葉をきっかけに虎猫や三毛猫が言葉巧みに事務長を丸め込む。事務長を憤らせたのは「(かま猫は) この頃はあちこちへ呼ばれているよ。何でもこんどは、おれが事務長になるとか云ってるそうだ。」という三毛猫の言葉であった。事務長は黒猫であることの非差別者の意識や劣等感を常に持っていた。非差別者の身分ゆえの肩身の狭さや後ろめたさを痛感しているために、かま猫の存在によって自分が手にした権力や地位を失いかねない事態を知った時、事務長は自分の保身を最優先して元凶であるかま猫を排除しようとする。かま猫は黒猫よりも社会的に下層に位置する身分であるし、また日常のかま猫を見ていたら書記の猫たちの讒言であることがすぐにわかるはずである。それにもかかわらず、書記の猫たちの讒言を見破ることができないのは、事務長が地位や権力に執着しているためと、かま猫に対して偽善的態度で接していたため

であった。事務長がかま猫の善良な人柄を見抜くことはなかった。それどころか、事務長はかま猫の心の支えのひとつであったのに、書記の猫たちと一緒になってかま猫の存在を無視していじめるのである。

> ああ、これが僕の仕事だ、原簿、原簿とかま猫はまるで泣くように思いました。（中略＝稿者）
> 一番書記の白猫が、かま猫の原簿で読んでいます。かま猫はもうかなしくて、かなしくて頬のあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴ったりするのをじっとこらえてうつむいて居りました。事務所の中は、だんだん忙しく湯のようになって、仕事はずんずん進みました。みんな、ほんの時々、ちらっとこっちを見るだけで、ただ一ことも云いません。そしておひるになりました。かま猫は、持ってきた弁当も喰べず、じっと膝に手を置いてうつむいて居りました。
> とうとうひるすぎの一時から、かま猫はしくしく泣きはじめました。そして晩方まで三時間ほど泣いたりやめたりまた泣きだしたりしたのです。それでもみんなはそんなこと、一向知らないというように面白そうに仕事をしていました。

無視するという行為はその人物の存在意義を否定するものである。存在意義を否定され、誇りにしていた仕事まで奪われたかま猫が悲しみのあまり泣きだしても、周囲は当てつけて「面白そうに仕事」をする。かま猫の悲しみや失意はとてつもないものであったことは想像に難くない。かま猫が第六事務所に書記として存在していることを疎ましく感じていた書記の猫たちはもとより、自分の権力や地位を守ることしか見えていない事務長が変わらない限り、第六事務所のいじめは解消することがない。いじめ問題の収束が絶望的な事態になった時、獅子が登場するのである。

４－２　いじめ問題の中断から見えてくる課題

かま猫のいじめがエスカレートしていき、もはや解決することのない事態にまでなった時、獅子が登場する。獅子が登場した時のかま猫と書記の猫たちの反応は対照的であった。書記の猫たちは「うろうろうろうろそこらをあるきまわるだけ」なのに対して、かま猫だけは「泣くのをやめて、まっすぐに立」つ。獅子の登場にかま猫がまっすぐに立ったことの意味について、中村龍一の「〈かま猫〉はこの絶望から救い出してくれる裁定を求めていた」という見解[14]や田近洵一のかま猫が「ようやくひとり立ちする姿」を表しているという見解[15]がある。獅子にいじめの裁定を求めているかま猫の依存の姿と捉える中村の見解と、ようやく自立することができたとする田近の見解は対蹠的である。いずれにしても、獅子の登場によっていじめ問題が中断されたことは間違いない。

> 猫どもの驚きようといったらありません。うろうろうろうろそこらあるきまわっているだけです。かま猫だけが泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。獅子が大きなしっかりした声で云いました。「お前たちは何をしているのか。そんなことで地理も歴史も要ったはなしでない。やめてしまえ。えい。解散を命ずる」こうして事務所は廃止になりました。
> ぼくは半分獅子に同感です。

獅子の「えい。解散を命ずる」の言葉には、第六事務所の深刻ないじめ問題を解決できずに、権力を行使してこの事態を中断させることしかできなかった獅子の断腸の思いが表れている。獅子は事態を収束するためにやむをえない決断を下したのであった。獅子が第六事務所の廃止を命じたこ

とで事態は解消されるものの、いじめ問題は解決することがないままに中断してしまった。いじめの本質的な問題は隠ぺいされてしまい、いじめ問題に根づく課題は残されたままになったのである。

５　「猫の事務所」の「ぼく」が語る意図

５－１　かま猫に寄り添う語り手の「ぼく」

「猫の事務所」の「ぼく」は、獅子がかま猫のいじめを中断させるために第六事務所を廃止させてしまったいきさつを語る中で、ところどころに自分の意見を次のように挟み込んでいる。

①ところが、今のおはなしからちょうど半年ばかりたったとき、とうとうこの第六事務所が廃止になってしまいました。というわけは、もうみなさんもお気づきでしょうが、四番書記のかま猫は、上の三人の書記からひどく憎まれていました（中略＝稿者）かま猫は何とかみんなによく思われようといろいろ工夫をしましたが、どうもかえっていけませんでした。

②みなさんぼくはかま猫に同情します。

③こんな具合ですからかま猫は実につらいのでした。

④それは猫なんていうものは、賢いようでばかなものです。

⑤ぼくは半分獅子に同感です。

「ぼく」が語っている途中で自分の意見を述べている②の「みなさんぼくはかま猫に同情します。」や③の「かま猫は実につらいのでした。」からわかるように、「ぼく」はかま猫が「みんなによく思われるようと」努めているのに、その気持ちが伝わらないことを哀れに思っている。牛山が「世間話をするような語り手の口調は、読者を話の中に誘い込み、話のおもしろさに引き込んで冷静な判断を停止させるような魅力がある。だから、語り手の価値判断が、疑いなく読者のものとなってしまう。」[16]と指摘しているように、かま猫の心境を汲み取って語る「ぼく」はどんなに好かれようと周囲に気遣っても、報われることのないかま猫を不憫に思う気持ちをところどころ口にしている。「猫の事務所」の場合、かま猫を哀れみ不憫に思う「ぼく」は、かま猫の境遇に同情する立場から語っている。かま猫に同情しながら「ぼく」が語っていることから、高校一年生の感想文はかま猫がかわいそう、かま猫の（つらい）気持ちはよくわかるといった読みの反応が多数を占めていた[17]。これは多くの高校一年生が、かま猫に同情して語る「ぼく」に共感したり同調したりしながらこの物語を読んでいるためだと考えられる。かま猫に同情した立場からの読みをしたＢさんの感想文が以下である[18]。

人間はいつでも何か攻撃の対象をつくろうとする心理状態にあるような気がします。それはなぜでしょうか。私はそれは人間の弱さ、心の貧しさにあると思います。何か自分以外のものに注目させて、責めることによって、みんなの関心をその人にだけ向けさせ、その人を見下げる事によって自分の位置が下がらないように安定させる。自分の欠点をごまかして攻撃されないようにしているにすぎない、と思います。そんな事をしなければならない人々は本当にあわれ

です。（稿者＝後略）

B さんは書記の猫たちや事務長の心の貧しさがかま猫をいじめる原因であると考えている。B さんの意見はとりわけ黒猫の事務長がかま猫をいじめる真因に心の貧しさがあることを認めている。例えば、「猫の事務所」の初期形の原稿は次のような語りで終わっていた。

「何といふお前たちは思ひやりのないやつらだ。ずゐぶんこれはひどいことだぞ。黒猫、おい。お前ももう少し賢こさうなもんだがこんなことがわからないようではあんまり情けない。もう戸籍だの事務所だのやめて了へ。まだお前たちには早いのだ。やめてしまへ。えい。解散を命ずる。」

釜猫はほんたうにかわいさうです。それから三毛猫もほんたうにかわいさうです。虎猫も実に気の毒です。事務長も黒猫もほんたうにかわいさうです。立派な頭を有った獅子も実に気の毒です。みんなみんなあはれです。かわいさうです。かわいさう、かわいさう。[19]

「猫の事務所」の初期形の原稿が「みんなみんなあはれです。かわいさうです。かわいさう、かわいさう。」という「ぼく」の語りで締め括られているように、かま猫・黒猫の事務長・書記の猫たち・獅子のすべての登場者は「かわいさう」な人物とされていた。B さんが指摘しているように、黒猫の事務長や書記の猫たちの心の貧しさや弱さがかま猫をいじめしまって、そのために書記の仕事を失った可哀想な登場人物であるといえる。当然、いじめられるかま猫も可哀想である。また初期形の原稿では獅子も「かわいさう」な対象になっているのは、「えい。解散を命ずる。」と第六事務所を廃止せざるをえなかった獅子の心境を推し量っているからであろう。しかし、「猫の事務所」の現在形の原稿ではこの最後の「かわいさう」と語られている部分はすべて削除され、代わりに「ぼくは半分獅子に同感です。」と、「ぼく」は自分の意見を最後に付け加えて、物語を終えている。「ぼく」は一貫してかま猫に同情する立場から語っていたのだが、最後の「ぼくは半分獅子に同感です。」という言葉にはかま猫を批評する深意が込められていた。

５－２　かま猫を批評して読者に問いかける語り手

「ぼく」が語り出すのは第六事務所が廃止されてから「半年ばかり」経った時期にあたる。つまり、「ぼく」は第六事務所が廃止された後でこの物語の顛末を語っている。第六事務所が廃止されるいきさつの途中で自分の意見をところどころ挟み込んでいる点に「ぼく」の語りの特徴がある。「ぼく」はかま猫に同情して、かま猫に寄り添う立場から語っていた。その「ぼく」の語りの中で、かま猫を唯一批評しているのが「ぼくは半分獅子に同感です。」という最後の言葉である。「ぼくは半分獅子に同感です。」という言葉の意味について、続橋達雄の「獅子の解散命令には、役人や、役所の否定的な側面だけがとりあげられ、その肯定的側面とか未来への可能性が示されていない、それゆえ〈ぼく〉は半分同感で半分反対」だと語ったとする見解[20]、中村龍一の「『救いようのない〈猫ども〉を見ていると〈獅子〉の強行手段も致し方ない』という思いと、『〈獅子〉の一喝で〈第六事務所〉を廃止していいのだろうか、それが本当の解決と言えるのだろうか』という自問」とする見解[21]、田近洵一の「強権発動による決着といった物語の結末に、語り手として不満を残していることを示している」という見解[22]がある。三者の見解は半分同感できない獅子の強行手段から「ぼく」の真意を意味づけている点で通底している。

「猫の事務所」の初期形の原稿ではすべての登場人物が「あはれ」で「かわいさう」な人物として語られていたのに、現在の私たちが目にする完成形の原稿では「ぼくは半分獅子に同感です。」という「ぼく」の語りが加えられている。一貫してかま猫に同情していた「ぼく」であった。しかし、最後の「ぼく」の語りには、獅子の解散命令によって第六事務所は廃止されて、かま猫をいじめた書記の猫たちや事務長だけではなく、いじめられたかま猫の書記の地位まで奪い、権力による強行手段を行使した獅子に「半分」しか同意していないことが明かされている。「ぼく」が半分しか同意できないのは、いじめの本質的な問題は隠ぺいされてしまったままで、いじめ問題に終止符をうったところにあった。見方を変えると、「ぼく」は半分だけ同意したのは、獅子の決断は第六事務所の深刻ないじめ問題を考えると仕方のないことかもしれないと考えたからであろう。「ぼく」が半分だけ同意した意図は何であろうか。ここに作者の意図が込められている。「ぼく」が最後に「ぼくは半分獅子に同感です。」と語ってこの物語を閉じた終わり方に着目した牛山恵の「その『半分』で、語り手は何を言いたいのか、この語りは、それを読者が考えるように仕向けている。」という見解[23]や田近洵一の「語り手は物語を放棄し」て「読者に問題をなげかけたのである」とする見解[24]がある。確かに、語り手の「ぼく」は「半分獅子に同感です。」と語り終えることで、読者に「ぼく」が何を半分同感して、何に半分同感できなかったのかを読者に考えるように働きかけている。

「ぼく」は第六事務所でかま猫がいじめられる原因は、かま猫が「夜かまどの中にはいってねむる癖があるために、いつでもからだが煤できたな」いから、かま猫は「ほかの猫には嫌われます」と語っていた。つまり、かま猫の姿形の「異質性」を第六事務所の書記の猫たちが受け入れられなったことがかま猫をいじめる発端となっている。黒猫の事務長とは異なって、かま猫は「生まれ付き」でかま猫になったのではなく、「夜かまどの中にはいってねむる癖」があるためにかま猫になった。かま猫が夜かまどの中で寝てしまうのは、土用に生まれたために皮が薄いことによる。かま猫は「あたりまえの猫」になろうとして幾度か窓の外で寝ようと試みている。ここにかま猫の努力の姿勢を見ることができる。しかし、かま猫は窓の外に寝ようと試みたのは数回だけで、根気強く「あたりまえの猫」になるために習慣を改めようとしていない。かま猫は「かま猫」から脱却するために自分の習性を根底から変えようとしていないのである。生れ付きは何猫でもよくて、ただ夜かまどの中で寝る習慣のある猫を猫社会では「かま猫」と見做している。自分の習慣さえ改めれば、かま猫は「かま猫」から脱却できる。脱却すれば、姿形の異質性は消えてなくなるだけではなく、猫社会の最下層のヒエラルキーからも抜け出せる。松原正義はかま猫がかまどの中で寝ることを「運命的なことで、努力によって克服できることではない。」と言及している[25]が、厳密に言えば、かま猫は生まれつき「かま猫」になったのではなく、習慣から「かま猫」となったのである。生まれつき黒猫である事務長とは本質的に異なっている。

猫社会において最下層のヒエラルキーに位置する身分となったかま猫であるが、これは生まれつきのためではなく自分の習慣によるものであった。最下層のヒエラルキーに位置するかま猫が世間の目に同僚として第六事務所の職務に携わっていることが、書記の猫たちの自尊心を傷つけている。かま猫は「かま猫」であることから抜け出すことよりも、書記の猫たちに好かれることに心を傾けている。かま猫は自分がいじめられている真因に向き合って考えていないのである。自分がいじめられる真因と向き合って考えていない以上、かま猫のいじめが解決することはない。また、いじめる書記の猫たちに「どうして私をいじめるのですか。いじめるのをやめてください。」とかま猫は声に出すこともしていない。第六事務所が廃止されるまで、かま猫がいじめに対して抵抗を示した言動は泣くことだけであった。かま猫が「かま猫」から脱却するために、自分の習慣を変える努力を

続けていたり、習慣を改善する工夫を少しでもしていたら、獅子は強行手段を使って第六事務所を廃止することも、かま猫や事務長・書記の猫たちから書記の地位を奪うといった最悪の事態は避けられていた可能性があったことは否めない。この思いが「ぼく」に「半分（だけ）獅子に同感です。」と語らせたのである。「ぼく」の「半分獅子に同感です。」という語りには、かま猫を例えにして、いじめられる真因について向き合って考え、解決に向けて言動する大切さを読者に問いかけている。

近年は教育界においてアクティブラーニングを取り入れた指導が推奨されている。これは学習者に問題解決に向けて、主体的に考える力を育成することが求められているためであろう。「猫の事務所」の「ぼく」はかま猫のいじめ問題を通して、かま猫がいじめられる根本的な問題に向き合い、問題解決に向けて行動していたら、最悪の事態は避けられていた可能性を示唆している。「ぼく」は問題解決に向けて自ら考え行動することの大切さを語っているのである。つまり、「猫の事務所」は学習者に問題解決に向けて自ら考え行動することの大切さを問うているところに教材的価値が認められる。近年ではこの物語は教科書教材として採用されておらず、教科書教材として読まれることはないけれども、学習者に問題解決に向けて自ら考え行動することの大切さを考えさせる物語として読む価値が十分にあるのである。

[1] 宮沢賢治の「猫の事務所」は『月曜』（大正 15 年 3 月 1 日）に発表された作品である。
[2]「猫の事務所」は三省堂の『高等学校国語Ⅰ』（昭和 60 年 3 月発行）及び『高等学校国語Ⅰ・改定版』（昭和 62 年 3 月発行）に採録されていた。
[3] 続橋達雄「寓話「猫の事務所」考」（『国学院大学栃木短期大学紀要』第 19 巻、国学院大学栃木短期大学、昭和 60 年 3 月）
[4] 高山秀三「猫の事務所－集団の力学」（『宮澤賢治 童話のオイディプス』、未知谷、平成 20 年 2 月）
[5] 牛山恵「宮沢賢治の童話に見られる批評性－「猫の事務所」の読みを通して－」（『日本文学』第 44 巻第 8 号、日本文学協会、平成 7 年 8 月）
[6] 松原正義「「猫の事務所」を教室で読む」（『日本文学』第 34 巻第 3 号、日本文学協会、昭和 60 年 3 月、p. 50）
[7] 注 3 に同じ（p. 11）
[8] 注 3 に同じ（p. 15）
[9] 注 4 に同じ（pp. 104-105）
[10] 松原正義「猫の事務所／宮沢賢治」（『高等学校国語Ⅰ・指導資料』、第 11 冊分、高等学校国語改定版編集委員会編、昭和 63 年 3 月、p. 4）
[11] 注 5 に同じ（p. 56）
[12] 望月理子「教室で読む「猫の事務所」－「半分同感」の意味－」（『日本文学』第 60 巻第 3 号、日本文学協会、平成 23 年 3 月、p. 4）
[13] 矢花真理子「宮沢賢治「猫の事務所」論」（『国文白百合』第 44 巻、白百合女子大学国語国文学会、平成 25 年 3 月、pp. 55-56）
[14] 中村龍一「人物に見えるもの、語りに見えるもの、読者に見えるもの－宮沢賢治『猫の事務所』を読む－」（『月刊国語教育』第 21 巻第 8 号、平成 13 年 10 月、東京法令出版、p. 84）
[15] 田近洵一「教育における〈読み〉の倫理－宮沢賢治「猫の事務所」の〈読み〉に視点を置いて－」、『社会文学』第 16 号、2001（平成 13）年 12 月、p. 125）
[16] 注 5 に同じ（p. 59）
[17] 注 10 に同じ（p. 54）
[18] 注 10 に同じ（p. 55）
[19] 宮沢賢治「猫の事務所」（『新校本 宮澤賢治全集』第 9 巻、筑摩書房、平成 7 年 6 月、pp. 78-79）
[20] 注 3 に同じ（p. 14）
[21] 注 14 に同じ（p. 83）
[22] 注 15 に同じ（p. 124）
[23] 注 5 に同じ（p. 61）
[24] 注 15 に同じ（pp. 124-125）
[25] 注 6 に同じ（p. 50）

（広島経済大学 非常勤講師）